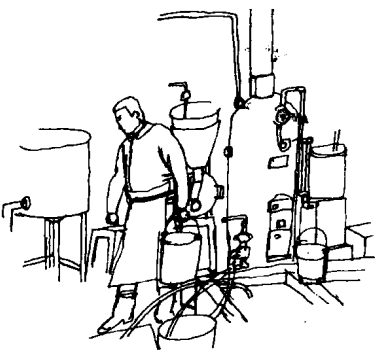
豆腐屋の四季

ある青春の記録

松下竜一



講談社

豆腐屋の四季

NDC 914　19.4cm

定価　四八〇円

昭和44年4月8日　第1刷発行

著者　松下竜一（まつしたりゅういち）
大分県中津市船場町
郵便番号871

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号112
電話東京九四三-二二一（大代表）
振替口座東京三九三〇

印刷所　慶昌堂印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

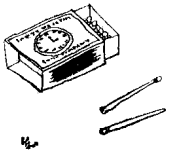
★落丁本・乱丁本はおとりかえします

© RYÛICHI MATSUSHITA 1969　PRINTED IN JAPAN

目

次

冬



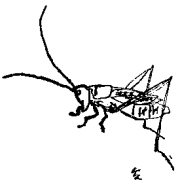
書きはじめる……10
歌のはじめ……12
いびつな豆腐……14
未明ひそかに……16
皿廻し……18
弟たちの彷徨……20
速達……22
歌を知らなかった冬……24
家出……26
死なず……28
満よ……30
思い出……32
ふるさと通信……34
命愛し……36
新しい年へ（昭和四十三年）……38
仕事はじめ……40
夜業の窓……42
ラムの死……44
妻、成人す……46
悲しみの臼……48
くどの歌……50
巨艦来たる……52
初めての稿料……54
妻の小箱……56
雪に転ぶ……58
大雪の日……60
朱の林檎……62
石工の友……64
小さな歌集（「相聞」のこと1）……66
驚きの始まり（「相聞」のこと2）……68
毎日新聞に載る（「相聞」のこと3）……70
朝日新聞に載る（「相聞」のこと4）……72
マイクに怯えて（「相聞」のこと5）……74

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

春

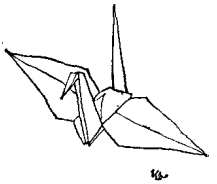
蕗のとう……78
義母のこと……80
私の献立……82
妻、選挙権を得る……84
テレビを禁ず……86
「相聞」のこと6……88
ふたつの手紙（「相聞」のこと7）……90
「つたなけれど」……92
「つたなけれど」後日……94
抒情……96
妊りて……98
水ぬるむ……100
テレビ撮影……102
テレビ放送……104
瞳の星……106
眼施……108
母の手紙……110
十三回忌……112
和亜へ（「ふるさと通信」から）……114
母のこと……116
母の死 I……118
母の死 II……120
姉……122
姉の子……124
歌の友……126
爪剪りて……128
あぶらげ……130
未だ繭ほどの……132
おから……134
少年福沢会……136
風の子と艦長……138
宮先生のハガキ……140

夏



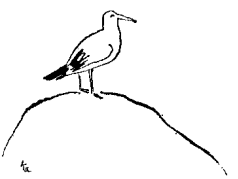
マツヨイクサ……144
アジサイ……146
時事詠……148
暗い窓から……150
五本のマッチ……152
涙……154
胎動……156
信じてくれ……158
寂しいなあ……160
梅雨……162
裸身……164
風鈴……166
妻の入院……168
参院選……170
折鶴……172
寂しい父……174
売れる日、売れぬ日……176
妻、帰る……178
虚名……180
歌とは？……182
真夏……184
小祝島……186
橋……188
山の顔……190
生きていたラム……192
ラムよ！ラムよ！……194
蒼眠……196
第十三信……198
老作家来たる……200
老作家去る……202
今も、灯が……204
けが……206
夏の終わり……208

秋



夜明け……212
静かな歩み……214
伯母二人……216
にがり……218
やもり……220
私の宝……222
生家を追われて……224
指輪……226
白鷺……228
起き忘れる……230
病む日々……232
神経痛……234
結婚式……236
祝婚歌……238
入院……240
読書……242
ぎんなん……244
偽作家後日……246
機械……248
運動会……250
オリンピック……252
生活の歌……254
万葉集……256
小島の祭り……258
反戦デー……260
木枯し……262
きびしさ……264
名を想う……266
千羽鶴……268
星の王子さま……270
吾子誕生……272
かもめ……274
書き終える……276
補遺……278

付録・相聞……281
あとがき……312



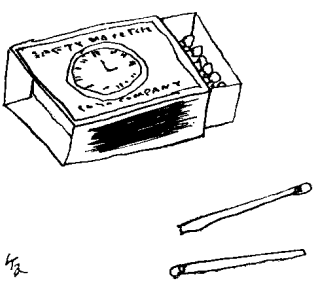
装丁・カット　風間　完

豆腐屋の四季——ある青春の記録

母に捧ぐ……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

冬



書きはじめる

ふと一冊の本を想った。最初に題名が浮かんだ。「豆腐屋の四季」。小さな平凡な豆腐屋の、過ぎゆく一年の日々を文と歌で綴ってみようというのだ。過去の思い出も過去の歌もちりばめて入れよう。それは、ひっそりした退屈で平凡な本にしかならぬだろう。登場者は、私と妻と老父と、姉や弟たちだけだろう。みな、平凡な市民に過ぎない。繰り返される日々も、華やぎに遠く、ただ黙々と続く労働のみだ。

○

そんな本を、はたして発行できるかどうか。たぶんだめだろう。だが、私は書いてみよう。今日、昭和四十二年十一月十九日から書き始めて、昭和四十三年十一月まで書き継いでみよう。たとえ、本として発行できなくても、それを書くことで、これからの一年の日々、私の思いは充実し続けるだろう。書き継いでいく一年に、どんなことが起こるか？　私の歌は絶えることなく続いているのだろうか。ひょっとして病気に倒れるのではないか。ひょっとして妻はみごもるかもしれない。どんな悲しみ、どんな喜びが待つ日々なのか。そんな日々のできごと、そんな日々の思いを克明に綴ってみよう。

○

今、私は三十歳。妻は十九歳。青春である。私は二十代の後半まで、自らの青春を圧殺して、ただ黙々と働き耐えるのみだった。その頃の日々を青春とは呼ばぬ。今、やっと遅い青春が、ひそかな賛歌で私をくるもうとしている。これからの一年、どんな悲しみが書きこまれようとも、「豆腐屋の四季」は、まきしく私と妻の「青春の書」である。生涯でただ一冊しか書けない「青春の書」である。

○

ふと想った一冊の本は、だれの序文もいただけない寂しいひそかな本だ。装幀もなく、表紙も薄い本だ。タイプ印刷の読み辛い本だ。冬、春、夏、秋の四章に分かれたその本の扉には、ただ次の一行が記されているのみだ。

母に捧ぐ……

○

私は凛々としてきた。なんだか、ほんとうにそんな本を発行できそうな気がしてきた。私はたちまち、妻に想いの中のその本を語る。お金がたくさん要るわねと、妻がいう。そうさ、たくさんのお金が要るだろうねと私は答える。二人で、一生懸命節約して貯めようよと妻がいう。

○

各地に初霜のたよりがみられるのに、当地はまだです。でも早暁の冷えこみはきびしく、私も妻もすでにしもやけに悩み始めています。毎夜寝る前、たがいにさすり合うのです。さあ、私はこうして今日、「豆腐屋の四季」冬の章を書き始めます。

歌のはじめ

泥のごとできそこないし豆腐投げ怒れる夜のまだ明けざらん

——加えたにがりがきかなかったのか豆腐が固まらない。泥のようなできそこないの豆腐を腹立てて庭に投げ捨てる。宝石のように星のきらめく冬空。夜はまだ明けてはいない。

作者、松下竜一は九州のある小都市で豆腐屋をいとなむ青年である。いつのころからかの、朝日新聞西部版の歌壇の投稿者のひとりである。西部版の作品には炭坑労働者の出詠が多く、すぐれた彼らの生活歌が異彩を見せていた。石炭不況がはじまり、彼らがストの怒り、転業の悲しみを訴え、やがて歌壇からひとりひとり名を消していったころ、豆腐作りの歌だけを作る、素朴な、まるで指を折って数えながらつづるようなこの青年の作品が私の記憶にとまるようになった。稚拙といえばこれほど稚拙な歌はなかろう。だが、ここには歌わなければならない彼ひとりの生活がある。

○

近藤芳美（こんどうよしみ）先生は、雑誌『芸術生活』（昭和四十年二月号）に、「地を踏むものの歌」として、私のことを、

このように書き始めてくださった。（のちに、先生の評論集『アカンサスの庭』に収載）

冒頭の歌が、私の朝日歌壇最初の入選歌である。昭和三十七年十二月十六日のことである。日記の十一月十八日に、その歌が、他の二首とともに書きこまれている。それ以前に歌はない。私が初めて作った歌だったのだ。

十一月十八日（昭和三十七年）

零時十五分に起床。仕事にかかる。風邪がひどく、しきりに咳が出る。少し熱もあるようだ。こんなあわれな身体で、懸命に働くのだから、どうか神様、けさはいい豆腐にしてくださいねとひとり声に出してまで願ったのに、またしても、さんざんのできそこないだった。煮釜に穴がありていて、そこから豆乳が洩れるのだ。布栓をしているのだが、たちまち焼けて役に立たぬ。釜ひとつ、たやすく買えぬ貧しさがくやしくてならぬ。やけになって、ぼろ豆腐を投げ捨てていたら、父が心配して起きてきた。「おい、夜中そんな音を立てると近所が覚めるぞ」という。畜生！　みんな覚めてしまえ。しあわせに、ぬくぬくと眠っている奴ら、みんな覚めてしまえ。おれのこの泥のようにみじめな生活を叩きつけてやりたい！

そのあと、いきなり私は歌を書きつけている。くやしさと、にくしみから、むらむらと私の歌は出発したのだ。文法も語法も詠法も知らなかった。歌の師も友もなかった。だが、かまわなかった。胸中から噴きあげるものを、懸命にまとめようと、私は指を折ってうたい始めていた。

いびつな豆腐

こんなに一生懸命働く私を、なぜ神様はいじめるのですか？　私は怒り疲れると、涙ぐんで、まだ明けぬ星空を仰ぎ、問いかけ訴えかけるのだった。二十五歳の私は、恋も遊びも願いはしなかった。ただ眠る前に、そっと日記に書きこむのだった。――どうか明日は立派な豆腐を造れますように。風邪の咳が軽くなっていますように。燃えるように苦しい胃腸が、ほんの少しでも楽になっていますように。しもやけの足指が、あまり疼きませんようにと。

だが、来る朝も来る朝も、豆腐はできそこない、あぶらげはひねこびて伸びなかった。思いきって煮釜を買い換えても駄目だった。そして私は冬じゅう、風邪の咳に悩み続けた。腐りゆくごとく胃腸は燃え、しもやけは疼くのだった。

蒼ざめた顔で、神を呪った。〈神の奴、おれを指さして、せせら笑ってやがる！〉

できそこなった豆腐を投げ捨てて、狂気のように荒れる私に、老父はおろおろしつつ、砕け散った豆腐の飛沫を、掃き寄せ掻き取り、水を流して土間を洗うのだった。

だれに向けようもない、やり場のない怒りに、じだんだ踏んで、私が荒れれば荒れるほど、老父は押し黙るのだった。その沈黙が、なおさら私を苛立てるのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com